

第41回 福崎秋まつり文化講演会

第1部 福崎町・遠野市友好都市提携記念講演より

遠野スタイルによるまちづくり

遠野市長 本田敏秋



平成二十六年八月二十三日に友好都市共同宣言を締結させていただき、

遠野市と福崎町がまさに地域と地域の絆によって、深く結ばれることを確認し合うことができました。福崎町からは、嶋田町長、志水議長、高

寄教育長はじめ、幹部職員の方においでいただき、調印式を行いました。考えてみれば、このご縁は、今から

百四十年前、一九一〇年、明治四十三年、柳田國男先生が著した『遠野

物語』に遡ることができます。百十九話の不思議な話が収録され、序文には「願はくはこれを語りて平地人を戦慄せしめよ」というメッセージを我々に残してくれているわけであり

まさにこのメッセージは、里人としての都会人、そして山人としての

中山間地域に生きる地方の人々が明治時代、富国強兵策という中であっ

て、近代化を目指していた日本に向

けられたものです。そういった中で、

地方が、農村が、疲弊していくとい

う時代の流れがありました。

この時代に、遠野出身の早稲田大

学生の佐々木喜善を「おもしろい学生

生がいるぞ」ということで、小説家

の水野葉舟が当時農商務省の役人であ

った柳田先生に紹介をしました。

当時佐々木喜善は、現在の文京区小

石川、凸版印刷本社近くに下宿して

いたとのことでした。

そして、現在は新宿の大妻女子大

学女子寮になっている所に柳田先生

が住んでいて、夜になると、佐々木

喜善が柳田邸に通い、遠野に伝わる

世にも不思議な話をいろいろ語った。

それを一つ一つ書き留めて、百十九

の話としてまとめて『遠野物語』と

して著したという百年以上前の歴史があるわけです。

この『遠野物語』があつてこそ、

今の遠野のまちが、あるのではない

のかなと思っております。佐々木

喜善と柳田先生という圧倒的な存在

の方との出会いの中から、名著『遠

野物語』が世に出たということにな

るわけであります。

それが、先般の八月二十三日、人

と人との繋がりが、福崎町と遠野市

が地域と地域の絆となって、友好都

市として連携することになりました。

そして、次の世代にどのような「ま

ちづくり」をして残していくのかと

いうことが今問われているのではな

いかと思っております。

今日は、高寄教育長さんに福崎町

内の鈴の森神社、辻川山、北野天満

宮の学問成就の道、柳田先生をはじめ

松岡兄弟の銅像、柳田國男・松岡

家記念館などをご案内いただきました。

また、福崎町産業祭におきまし

て、私も大変な元気をいただきました。

まさに、農業、商業、工業が、

バランスのとれた中であつて、この

福崎町が成り立っているということ

を強く感じました。産業祭のブース

では、「市長、福崎町の元気を持つ

て帰れよ！」と励ましのエールもい

ただきました。この産業祭のこの大きなエネルギーを、遠野に持ち帰って、今後の元気に繋げたいと心に誓ったところであります。

それぞれのブースでの皆さんの笑

顔、大変素敵でありました。商工会

館二階の巨大迷路で子どもたちがは

しゃぎながら、非常に楽しそうに、

家族連れで走り回っている姿、そ

ぞれのブースにおいても、商工会女

性部の皆さん、青年部の皆さんが本

当に笑顔を絶やさず、町民の皆さん

に呼びかけておられました。その姿

こそがまさに「まちづくり」、「地

域づくり」の底力であり、産業祭、

文化祭の中から見出すことができました

と思います。

福崎秋まつりは、四十一回目とい

うことです。から、伝統のある大きな

イベントではないのかなと思います。

私も本当に目で見、耳で聞き、そし

て肌で感じたことを皆様に報告を申

し上げ、「福崎町の元気を持つて帰

りなさい」というエールをきちんと

受け止め、遠野に帰り、遠野市民に

福崎町とどのような形の付き合いが

できるだろうか考えたいと思います。

お互いに柳田先生の「平地人を戦

慄せしめよ」という言葉の重さ、と

いうよりも、「しっかりとしろよ」と

いう励ましの言葉を今二十一世紀に生きる我々として、しっかりと受け止めていかなければいけないという決意を新たにしているところであります。

さて、福崎町の皆様に遠野のことをご紹介申し上げたいと思います。遠野は、人口が二万九千五百人。三万人をちよつと割った町であります。ただ、柳田先生が百四年前、遠野を訪れたとき、何でこの山の中にこれだけの賑わいを示しているんだということを、『遠野物語』の序文に書き記しているわけです。北上高地という八百メートルから千メートルくらいの中が連なっている中にごさいます。

岩手県では北上川流域の平野部の盛岡、花巻、北上、奥州市そして一関市に新幹線と高速道路が走っております。花巻空港もあります。岩手県の人口の六、七割はこの北上川流域に集積しており、産業もそこに集積しています。

そこから、ちよつと太平洋に向かって東側に入りますと、千メートル級の山が連なり、三陸海岸のリアス式海岸に落ち込んでいくという環境の中で、沿岸と内陸の中間点に位置するのが遠野盆地であり、面積が八

百二十五平方キロメートル、約一万世帯が住んでいるわけです。

遠野は、藩政時代から沿岸と内陸の交流の拠点として、人と馬が行き交うまちでした。市の日には「馬千匹、人千人」、或る本には「馬三千、人三千」と書いてある文献もあります。石高は一万二千五百石で南部藩の遠野領として筆頭家老が領主として治め、伊達藩との藩境の警護も担っていました。

学者の先生方のお話を聞きますと、遠野領は藩中藩と言われるくらいその主体性があり、独立心が強かった。そのような歴史の中に遠野というまちがあったということです。その領主は、南部藩の藩主から様々な権限を任せられ、人を処罰する権限まで任せられていたということでもあります。

今は女性の時代であると言われておりますけれども、すでに三百八十年以上前、遠野には清心尼公という女性の殿様がいました。男女共同参画社会と言われておりますけれども、すでに藩政時代には女性を殿様にし、領内を治めていたようであります。

そのようにすでに自立心と主体性の強いまちというものがありました。

そして、遠野盆地という寒暖の差も激しく、たびたび飢饉に襲われる状況の中で、お互い助け合うという精神は、遠野盆地の一町十カ村中に伝統として生きてきたということになるのではないのかと思っております。

柳田先生が遠野を訪れた一〇〇年前も、そのような遠野郷一町十カ村に「まちづくり」が行われており、人と物が行き交う交流・交易の「宿場まち」でもありました。沿岸部から四十キロメートル離れた遠野に買い物に来る人。或いは遠野の旧制中学に進学する人もいたということでもあります。

人と物が行き交う中にあり、沿岸から峠道を四十キロメートル、約十時間歩かなければ遠野に着かなかつた。そうなってくると、峠道を越える時に、疲れ果てて、幻覚か幻聴でキツネに騙されたというように、佐々木喜善がそのような不思議な話を柳田先生に話をして聞かせたことから、『遠野物語』が生まれたということ、は、そのような自然的な、歴史的な、或いは風土的な、更には地勢的な要因によるものなのかなと思っております。

明治に入り、大正、昭和という時代の中で半世紀ごとに合併が繰り返

されたのが、日本の市町村の歴史であります。

明治二十二年、近代国家を目指した政府は、小さな集落を維持しつつ、市町村という制度を導入しました。それから五十年の時を経て、昭和二十八年頃に大きな合併がありました。それからまた五十年の時を経て平成の大合併によって、また市町村という仕組みが変わりました。

遠野も明治の合併におきまして、一町七カ村がそれぞれ町村として成り立ちました。その後、五十年を経て、昭和の合併の時に一町七カ村が合併して遠野市が誕生しました。そして、もう一方では、鱒沢村、達曾部村、そして宮守村という三つの村が合併して、宮守村という村が誕生し、遠野郷は遠野市と宮守村の一市一村となりました。この一市一村がまた五十年後に平成の大合併を迎え、「これじゃ人口減少にとても耐えられない。なんとかまた合併しましよ」ということで一市一村が平成十七年十月一日に対等合併して「新・遠野市」が誕生したわけです。「新・合併をした時に私は言いました。「柳田先生が遠野を訪れた百年前、遠野郷は一町十カ村だった。それが百年の時を経て人口も減り、情報通

信網も道路網も飛躍的に構築されてきた。このままでは宮守村も遠野市もなかなか前に進まないだろう。数合わせの合併ではないんだ。一町十カ村というひとつの遠野郷としてこれまでも地域づくりを進めてきたんだ。その百年前の姿に戻るといいう形の地域づくりがあってもいいんじゃないか」

そうして、宮守村に合併を申し入れて、対等合併というひとつの選択肢のなかで、新・遠野市を誕生させるというボタンを押したわけでありませう。

「市長、あなた何を考えているんだ。こっちは市だぞ。あつちは村じゃないか。対等合併することはないだろう。やったとしても吸収合併なんだ」という市民の皆様の抗議もありました。

それはそうかもしれませんが。しかし、村は村として五十年、百年の歴史がある。遠野市も同様です。それが次の五十年、百年先の新しいまちづくりを行うとなれば、お互い対等の立場で進めるということがあってもいいのではないのでしょうか。村だから市だからといったって、仕組みは同じです。村長がいて、議会があって、そして職員がいて成り立って

いる仕組みは同じです。従って、対等合併です。

「市長、そんな事すれば今度は失職するんだぞ。それでもいいののか」という話がありました。私は市長としての仕事をそのまま続けたいという気持ちだけで、まちづくり・地域づくりは行いません。新たな地域づくりを行うスタートだから、そのためには改めて新・遠野市の首長としても一度選挙をやって挑戦させていただけですか？という選択肢もあってもいいのではないのでしょうか。

「やつぱり、ばかだなあ」とまで言われました。「何故、自らの市長という職を捨ててしまうのか？吸収合併にすれば、あなたはそのまま市長でいられるんだ」という話もされました。

確かにその通りかもしれませんが。しかし、そのような名誉だとか地位だとかを考えて合併するというものではないと思います。私は対等合併を行い、そして失職して、選挙を経て新たに新・遠野市のまちづくりを取り組むことになりました。

遠野郷一町十カ村をひとつの単位として新たなまちづくりを行う。人口減少がどうした、それがなんだ、それに向かって挑戦するという気合

いの中で、新しい遠野市をつくっていかなければなりません。

柳田先生は言っています。「願わくはこれを語りて平地人を戦慄せしめよ」地方頑張れと言っているじゃないですか。ですから、我々が頑張らないでいっただいどうするんだ、という気持ちです。

あれも大変だ、これも大変だ、おねだりばかりしては何もなりません。我々には藩政時代から、明治、大正、昭和、平成という時代にあっても、強かに様々なことに挑戦してきたという遠野の歴史があります。

私は、ある方からこのようなことを言われました。「合併は単なる数合わせじゃないぞ、市長。『場の力』を大事にしろよ。『場の力』とは、自然の力、伝統の力、歴史の力、そして、もう一つ文化の力だ。自然、伝統、歴史、文化、これをきちんと踏まえたまちづくりを行うことが大事なんだ」

この平成の大合併は何だったんだろう。数合わせの合併だったのではなかったのかということが全国至る所で聞かれます。やはりこの「場の力」をどのように生かしていくか、この人口減少時代を強かに生き残るためにも住民の力を信じて自らのあ

るべき姿というのを見出して行くんだ、ということも大事なことでないかと思つているところであります。このような、人と人との繋がりが、そして地域と地域の絆を高度経済成長以降いつの間にか我々は忘れてしまつていのではないだろうかと思つていたわけでありませう。

そして、忘れてはならない東日本大震災。平成二十三年三月十一日、午後二時四十六分、大変な災害が起きました。今、岩手県では、四年目の冬に入ろうとしているわけでありませう。三万人以上の方が、未だに仮設住宅に住まざるを得ない。その他千百名を超える方が、身内の元にも家族の元にも戻れない行方不明者なんです。

そういつた中で遠野市は、沿岸と内陸の交流の拠点として果たすべき役割がある。遠野には海がない。従つて津波は来ない。だから関係ないじゃないんです。遠野だからこそ果たす役割があります。助かった命、これをどのように繋いでいくか、そのために遠野が果たす役割があるんじゃないかということ、後方支援活動を行ったわけでありませう。

被災地ではお米が無くなりました。おにぎり一個を三人で分けて食べた

という状況で、十四万食のおにぎり
を遠野市民が必死になつて握つて、
被災地に届けました。とにかく、あ
りとあらゆる物を持って行き、そし
て被災地の皆様に救援の手を差し伸
べたわけでありませう。

その中では、福崎町の皆様からも、
本心に心温まる救援物資を遠野市に
寄せていただきました。ダンボール
に綺麗に仕分けされた衣類を届けて
いただきました。まさに福崎町の皆
様の心根といったものが、私どもに
届いたわけでありませう。それを沿岸
被災地の皆様に頑張つて欲しいとい
う思いと共に確実にお届けしました。
このような全国の市町村の仲間によ
る水平連携というひとつの仕組み
によって、一瞬にして家族や住居を
失い、どこにその怒りをぶつけてい
いのか分からない被災者の方々に、
元氣と勇氣を与えることができました。

国や県が何もしてくれないと嘆く
のではなく、市町村同士がお互い連
携をし、必要な物資をどんどん、被
災地や遠野市に寄せていただいた。
遠野市に救援物資を送ってくれた全
国の仲間は、百近い市町村がありま
した。遠野は、それらを間違い無く
被災地に届けたわけでありませう。

その中で私は、「思いは見えない
けれども思いやりは見える、心は見
えないけれども、心遣いは、心配り
は見える」という、東日本大震災当
時よくテレビCMで出てきた言葉を
思い出すわけでありませう。

やはり、この思いやり、心遣いと
いったようなものが如何に大切なも
のなのか、この東日本大震災で私は
非常にショックなことがありました。
有名な全国紙の若手の記者がこうい
うことを言ったのです。

「市長さん、遠野市の方々は、海
もなく津波も来ないので何故こん
な一生懸命になつて、被災地の皆様
に向き合っているんですか？」そこ
まではよかつたんです。その次に
出てきた言葉は、「何か得になるん
ですか？」という言葉だったんです。
私は耳を疑いました。つい我を忘れ
て、「あなたたちよつとここに座りな
さい」と言つて座らせて、彼に言
いました。

「今、我々が、この助かつた命、
頑張りたい！という気持ちを何とか
して支援していくのが、人としての
務めじゃないでしょうか？他の市町
村のことなんだから、国や県から何
か指示があればやるんだ、と座して
待っているわけにはいかないんだ。

生死を分ける状況を目の前にして、
国や県から何か指示があつてから、
というわけにはいかないんですよ。
得とか損とかじゃないんですよ。あ
なたは、どうして、損するからやら
ない、得するからやるというよう
な考え方をするんですか？あなたは、
考え方が間違つていますよ」という
話を約一時間説教し、理解してもら
いました。

戦後という時代の中で、我々が
つの間にか、これは得をするあるい
は損をするという価値判断で命とい
うものと向き合うようになっていた
のかなあということを感じました。
しかし、東日本大震災によつて、そ
うじゃないぞ、みんな仲間だ、家族
だ、そして地域なんだ、ということ
を私は再認識いたしました。
そして、これからの地域づくりは、
まさにそのような人と人との繋が
りを大事にして、市町村間も水平連
携して、それぞれ補い合いながら、強
かに生き残る、活力を見出していく
という時代になつたのではないのか
と思つているところでございます。

福崎町とは柳田國男先生との繋が
りから、福崎町の皆様との絆を更
に強めて、遠野市は元氣を出して
いきたくと思ひます。

先ほど、商工会の女性部の方から
言われました。「今度の十一月の末
にはイベントがあつて、そこで得た
義援金を、被災地の方々に届けます
よ」と。そういう仲間が増えること
は嬉しいことです。私は遠野に帰
りましたら、遠野の皆さんに、被災地
の皆さんに、福崎町の皆様の思いを
伝えながら、「大変だろうけれども、
頑張ろうよ、全国の仲間がみんな心
配して、頑張れと言つているぞ」と
いったことを伝えるのも、ひとつの
役目ではないかと考えています。

最後に「遠野スタイル」というの
は、おねだりはない、そして、果敢
に挑戦をする、という中から、可能
性を少しでも引き出す、あるいは引
きずり込む、そのような姿勢を意味
します。それは、自然、歴史、文化、
風土、といったものから、すくいあ
げられる「場の力」である、という
ことを、繰り返しでありますけれど
も、申し上げまして、私の話は終
らせていただきます。

